

O-2-7-13 口腔乾燥を示すインプラント長期症例

○吉井あい子¹⁾, 渡辺 悦子¹⁾, 渡辺 孝夫²⁾
医療法人恵生会 厚生歯科¹⁾, 神奈川歯科大学 人体構造学講座²⁾

Long-term follow-up of the case with xerostomia

○YOSHII A¹⁾, WATANABE E¹⁾, WATANABE T²⁾
Kosesika dental clinic¹⁾, Oral Anatomy, Kanagawa Dental College²⁾

I 目的: 口腔乾燥症は、唾液分泌機能低下による口腔内の過度の乾燥を示す疾患で、唾液の流漏性の低下により付着しやすくなった細菌が増加し、ウ蝕になりやすいと言われる。その原因は、服用薬剤の副作用、金属アレルギー、扁平苔癬、シェーグレン症候群、悪性腫瘍など多種である。今回、初診時は症状を示さず、経過観察中に発症したインプラント患者のメンテナンスを経験した。口腔乾燥症を示す患者のインプラントメンテナンスについて検討した。

II 材料ならびに方法: 年齢45歳、女性、身長156cm、体重57kg。全身疾患、常用薬の服用はなかった。初診日1983年8月1日。主訴、上顎が総義歯であることに不満。口腔乾燥について初診時の訴えはなかった。1999年口腔乾燥の症状を認めたが、本人は乾燥状態を自覚していなかった。安静時唾液量0.05ml/5分、刺激唾液量0.8ml/5分と、ともに唾液分泌が非常に少なく、唾液分泌量低下による口腔乾燥症が考えられた。口腔所見、衛生状態は良好。初診時、上顎は全部欠損、下顎は31, 37, 41, 42, 45, 47が欠損、残存歯は32~36, 43, 44, 46に8歯。経過、上顎にインプラント支台のブリッジ型の上部構造を装着した。下顎は、インプラントと天然歯支台の冠ブリッジ型上部構造を装着した。1984年2月19日より2009年4月19日までの間、数回

に渡り、ウ蝕により残存歯を抜歯、その都度、インプラントを植立、最終的に上下完全無歯顎、インプラント支台による冠ブリッジ型上部構造を装着した。

III 結果: インプラント治療後の経過観察中に口腔乾燥症を示した症例を経験した。本症例は、インプラントには問題がみられなかったが、残存天然歯に連続的にウ蝕が発生し、抜歯、インプラント植立を繰り返し、最終的に全部欠損、インプラント支台の冠ブリッジ型上部構造になった。

IV 考察ならびに結論: 本症例は、インプラント治療経過観察中に口腔乾燥症を呈した。インプラントには影響を及ぼさなかったが、残存天然歯に高頻度にウ蝕が発生し、抜歯およびインプラント植立を余儀なくされた。口腔乾燥を示す患者のインプラントメンテナンスについて検討した。